

大人との語り合いで人生の当事者精神を生み出す

ハタモク代表 與良昌浩さん



ハタモク代表
與良昌浩 ちゅう・まさひろ
株式会社もくてき代表取締役 伊藤忠
商事、アクセンチュア、ユーエスエス
などを経て、現職。

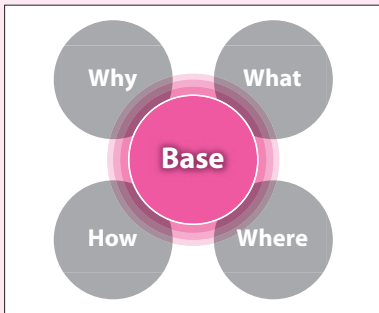
◎安心できる雰囲気があれば内面を語り出す

私が代表を務める任意団体「ハタモク」は、学生・生徒が社会人と働くことの意義や目的を語り合う場づくりをしています。「ハタモク」のワークシヨップを中学校で行う場合には、生徒3〜4人のグループに大学生が社会人が1人ずつ加わり、働く目的や将来の夢などをテーマに語り合います。生徒たちは「自分は何がしたいのか」「なぜその職業に就きたいのか」などについて、私たち大人に自分の言葉で話してくれま

す。「中学生がそこまで考えているのか」と、驚くこともしばしばです。

「思春期の子どもが見ず知らずの大人に、そんな内面まで話すのだろうか」と思う方もいるでしょう。確かに始まる時は、初対面の大人を前にして身構えています。これでは打ち解けて語

図 ハタモクで使う4種類の質問



「ハタモク」では、生徒の「Base（なりたい自分）」を浮かび上がらせるために、「Why（なぜ）」「What（何を）」「Where（どこで）」「How（どのように）」の4種類の質問を用意。「何がしたいのかが分からない」と悩む生徒でも、複数の視点から問うことで目的を見い出せるという

り合えませんかから、まず大人が自分の悩みや失敗談などを話し、生徒との距離を縮めます。最初に語り合う話題にも気を配り、「好きなアイドルは？」「得意な教科は？」など、答えやすいことを聞いてから、その理由を尋ねることもしています。たどたどしかったり、的外れだったりする返答にも、大人は熱心に耳を傾けます。

このような配慮により、生徒が安心して発言できる雰囲気がグループ内に生まれます。これさえ出来れば、「どのような働き方、生き方がしたいか」といった内面に踏み込んだ問いに対しても、生徒は一生懸命に考えて話してくれるようになるのです。

◎なりたい自分を思い描くことで主体的になれる

将来、自分が何をするために、どのような方向に進みたいのか。こうした問題には答える人の数だけ正解がありますが、自分なりの答えを見付けることは簡単ではありません。私は30歳を過ぎてやっと見付けられましたし、見付けられないまま社会に出る人もいます。社会に出るまでの時間があるうちに、模範解答のない問題と向き合うことの楽しさを体感し、考える習慣を身に付けてほしいと、私たちは中学生を対象にした「ハタモク」も行いました。

生徒が日常的に考えるようになるためには、普段の語り掛けが最も大切だと思います。例えば、教科指導で正解を問うだけでなく、先生が

なぜその発問をしたのかを生徒に質問してみたいかがでしょうか。先生方は生徒が安心して発言できる雰囲気をつくっているはずですから、きつと活発に意見が飛び交うと思います。

先生方が1人ずつ生徒のグループに加わり、「ハタモク」のように語り合うことも、方法の1つだと思えます。または、グループを異学年混合にしてみても良いかもしれません。「ハタモク」で大人が生徒にしたように、先生や先輩が生徒の話を受け止めることが出来れば、有意義な話し合いになるでしょう。私の経験では、多様な大人と交流する方が、生徒の視野が広がり、考えも深まると感じています。保護者や地域住民といった学校外の大人に協力してもらい、生徒一人ひとりとじっくり話す機会が出来ると、取り組みは更に充実するはずです。

なりたい自分像が見えてくれば、日々の学習や進路選択に対する生徒の気持ちも変わってくるはず。周囲の価値観に左右されるのではなく、自分の価値観によって決められるようになると思います。いわば、自分の人生に対する当事者精神が生まれるのです。たくさんの中学生と語り合う中で、彼らが主体的に判断し、行動するための力を十分に秘めていると、私は確信するようになりました。整える環境次第で、生徒が先生方の期待以上に力を伸ばすこともあるのではないのでしょうか。

生徒の心に火をつける

仲間と共に考え、決断する場や機会を提供する

株式会社 川崎フロンターレ 川口良輔さん

◎対話を通して、子ども自ら考え、判断させる

株式会社 川崎フロンターレの育成・普及部では、地域の小・中学校の体育の授業でサッカーを教えるスポーツ教室から、中学校の部活動のサポート、Jリーグで活躍する選手を養成するクラブチームの運営まで、幅広い活動を行っています。かわかる子どもたちの競技能力はもちらん、サッカーに対する意欲もさまざまです。

しかし、指導を行う上でのコンセプトは、どの子どもにも共通しています。それは、子どもが自ら進んで取り組める環境をつくり、子どもの自信とやる気を高めることです。自分で考え、行動し、良い決断の出来る選手を育てることは、一瞬の判断が重要になるサッカーでは不可欠だからです。また、主体的に行動できる姿勢は、社会に出てからも必要です。

そのために指導陣が心掛けているのは、トップダウン型で一斉指導をするのではなく、「コーチはこう思うけど、きみはどう考える?」と、子どもたちとの対話を大切にすることです。

◎大切なのは、双方向性、個別対応、継続性

以前、私もトップダウン型の指導をしていた時期がありました。しかし、厳しく指導すればするほど、子どもがこちらの意図とは違う方向に行ってしまうのです。追い詰められた私は、一斉指導をやめ、子ども一人ひとりの現状をじっくり観察しました。

そして、迎えたクラブチームの中学1年生の合宿。通常は起床や就寝時間、食事のことなど

厳しく言いますが、そうした指導は行わず、全て子どもに決めさせました。小学校時代、トップクラスで活躍した選手も参加していましたが、指導を行わないと先陣を切って深夜まで遊んだり、インスタントラーメンを食べたりしていました。「今まで厳しく言ってきたことの意味が全く伝わっていない」と愕然としましたが、睡眠不足で体調を崩す子どもが出てきても、あえて何も言いませんでした。

最終日の試合では、出場メンバーに「よく寝て、よく食べていた選手」を選び、戦術を駆使して7対0で大勝させました。試合後、「この試合は競技力ではなく、合宿中によく寝て、よく食べた選手を選んだ。きみたちも競技力は十分あると思うが、きちんと寝て食べていないから、体調が良くないよね。寝る、食べることは大切なこと。合宿から帰ったらどうすればいいかな?」と問い掛けました。先陣を切って夜中まで遊んでいた子どもはその後、レギュラーになれない時期もありましたが、地道に努力し、高校最後の選手権では華々しい活躍をしました。

こんなこともありました。中学生チームに、他の選手がミスをするや「やめてしまえ」など乱暴な口をきく自分勝手な選手Aがいました。そのうち、他の選手との関係が悪化しましたが、私はしばらく何も言わず、それぞれがどのような不満を抱いているのかを観察しました。そして、A選手が無視をされたりパスをもらえなかったりと不利な立場に立ったタイミングで、A選



株式会社 川崎フロンターレ
川口良輔 *かわぐち・りょうすけ*
育成・普及部、育成・スクールグループ長。スクールコーチや、U-15監督、スカウトなどを経て現職。

手に「今の状況をどう思う?」と聞いたのです。すると、A選手は「無視されてもやめないよ。僕は大丈夫」と言いました。この強いマインドは、スポーツ選手には必要な要素です。

次に、選手全員を集め、「A選手の言葉を聞いてコーチはすごいと思った。でも、どんな選手でも弱みはある。みんなの気持ちも分かるけれど、A選手の良いところも見てほしい。時間は限られているのだから、お互いの良いところを伸ばした方がいいと思うけど、どうかな?」と問い掛けました。一方、A選手には「きみのマインドは素晴らしいよ。でも、乱暴な言葉は良くない。きみが今のままでいいと思うのなら、自分で決めてそうしなさい。でも、相手を思いやる気持ちはチームプレーでは大事だよ」と言いました。その後、A選手はサッカーの強豪校に進学し、キャプテンを務め、今は大学生になり、高い社会性も身に付けた大人になりました。個人レベルだけでなくチームで話し合い、互いの良さを生かすような結論を導き出させる練習の場を与えることも、大切なのだと実感しました。

子どもは、体験を通して多くを学びます。トライ&エラーを繰り返して、自分で考える機会をたくさん与えることが成長には欠かせません。大人の役割は、うそをついたり、話を大げさにしたりせず、誠実に子どもと向き合って信頼関係を築くこと。そして、問い掛けやアドバイスを通じて、子どもが自ら考え、決断できるように導くことなのだと思います。